

宗教研究 2009 年度 総目次

第 83 巻第 1 輯 (360 号) 2009 年 6 月

論文

- 遜りとポレミクの弁証法——ハーマンからキルケゴールへ—— ……須藤 孝也 1
- ハイデッガーの神話問題 ……田鍋 良臣 25
- イスラームにおける「救済の確証」
——マートゥリーディー学派を中心に—— ……松山 洋平 47
- ポストコロニアル・インドにおける「伝統」の変革
——現代のサティ論争におけるアシス・ナンディと批判的伝統主義——田中 鉄也 71
- 現代の浄土真宗におけるグローバル化
——価値の相対化，機能分化，社会倫理—— ……ウーゴ・デッセイー 93
- 生活実践としての仏教——高齢女性と寺院の親密性に関する一考察—— ……後藤 晴子 115
- 関係論としての「国家神道」論 ……田中 悟 139
- 民俗儀礼と日常的な身体経験——岩手県岳神楽を事例として—— ……長澤 壮平 161

書評と紹介

- 細谷昌志著『田辺哲学と京都学派—認識と生—』 ……浅見 洋 183
- 小坂国継著『東洋的な生きかた—無為自然の道—』 ……井上 克人 189
- Céline BÉRAUD, *Prêtres, diacres, laïcs:*
Révolution silencieuse dans le catholicisme français ……岡本 亮輔 195
- 末本文美士著『鎌倉仏教展開論』 ……佐藤 弘夫 201
- 宮家準著『神道と修験道—民俗宗教思想の展開—』 ……白川 琢磨 206
- 川村湊著『牛頭天王と蘇民将来伝説—消された異神たち—』 ……小池 淳一 210
- 西村玲著『近世仏教思想の独創—僧侶普寂の思想と実践—』 ……養輪 顕量 216
- 藤田大誠著『近代国学の研究』 ……桂島 宣弘 221
- 澤博勝著『近世宗教社会論』 ……由谷 裕哉 227
- 加藤信朗監修，鶴岡賀雄・加藤和哉・小林剛編
『キリスト教をめぐる近代日本の諸相—響鳴と反撥—』 ……星野 靖二 233
- 谷川穰著『明治前期の教育・教化・仏教』 ……林 淳 239
- 浅川泰宏著『巡礼の文化人類学的研究—四国遍路の接待文化—』 ……真野 俊和 245
- 大島清昭著『現代幽霊論—妖怪・幽霊・地縛霊—』 ……土居 浩 252
- 韓国宗教民俗研究会編『韓国の宗教と祖先祭祀』 ……川上 新二 258
- 長谷千代子著『文化の政治と生活の詩学
——中国雲南省徳宏タイ族の日常的実践——』 ……志賀 市子 265
- 会報 …… 271

第83巻第2輯(361号) 2009年9月

論文 特集: 宗教と倫理

中国における生命倫理言説に見る宗教性

——人間の尊厳と有徳の共同体——	池澤 優	1
公共哲学と宗教倫理——「幸福な社会」形成のエートス——	稲垣 久和	25
悪の問題を再考する——現代哲学と反神義論——	伊原本大祐	51
宗教と環境倫理	岡田真美子	75
オックスフォードグループ運動における〈心なおし〉の実践とその意義	葛西 賢太	97
対話的倫理の宗教的人間学的展望	金子 昭	121
「境界」の脱構築と倫理		
——「ドリー以後」における人間の自己理解を中心にして——	金 承哲	143
「宗教」と「カルト」のあいだ	櫻井 義秀	165
宗教と倫理の相剋の時代に	関根 清三	191
仏教と倫理——〈宗教的实践〉についての一考察——	高田 信良	215
身体の聖化——宗教哲学の一視点——	谷 隆一郎	237
正義と配慮		
——近代フランス・カトリック世界における倫理的活動の展開——	寺戸 淳子	263
語りえなさに耐える——水俣病事件がもたらした倫理と宗教の回路——	萩原 修子	289
インド宗教における「宗教と倫理」の関係性の考察		
——シク教研究を中心として——	保坂 俊司	313
感情のセラピーの源泉をめぐって		
——スピノザ『エチカ』を手がかりに——	森岡 正芳	339
宗教と倫理——ドイツ観念論思想を手掛かりとして——	諸岡道比古	361
初期アブー・ハニーファ美德伝の編纂期における		
言い伝えの選別基準について	柳橋 博之	385
書評と紹介		
関根清三著『旧約聖書と哲学—現代の問いのなかの一神教—』	勝村 弘也	409
佐藤弘夫著『死者のゆくえ』	関沢まゆみ	416
西海賢二著『武州御嶽山信仰』	山口 正博	421
会報		428

第83巻第3輯(362号) 2009年12月

論文

「アニミズム」の語り方——受動的視点からの考察——	長谷千代子	1
愛は義務になり得るのか——キェルケゴールのキリスト教倫理——	スザ・ドミンゴス	25
西田幾多郎の『善の研究』とウィリアム・ジェイムズ	横田 理博	49

総目次

『論理哲学論考』における「語りえないもの」と「沈黙」をめぐる新解釈

- ウィトゲンシュタインの生涯において「文番号七」がもった意味——…星川 啓慈 73
 ザラスシュトラの預言者化——一〇世紀アラビア語文献に見る

- アーリア人神官からセム的預言者への変貌——……………青木 健 97
 現代ユダヤ思想における宗教と政治の関係

- ヴァイレルとラヴィツキーによる「ユダヤ神権政治論争」—— ……平岡光太郎 121
 現代スーフィズムをめぐる諸言説——西欧の期待とそれへの応答—— ……高尾賢一郎 143

- 「松会の成立」へ——中世彦山における儀礼群の集約——……………山口 正博 165

- 富士行者・食行身禄は本当に「ミロク」だったのか……………大谷 正幸 189

- ハワイ日系仏教における故国日本……………高橋 典史 213

書評と紹介

- 世界の宗教教科書プロジェクト編『世界の宗教教科書』(DVD) ……西脇 良 235

Hiroshi KUBOTA, *Religionswissenschaftliche Religiosität und*

Religionsgründung. Jakob Wilhelm Hauer im Kontext des

- Freien Protestantismus* ……深澤 英隆 240

- 堀江宗正著『歴史のなかの宗教心理学—その思想形成と布置—』……………葛西 賢太 247

- 藤田宏達著『浄土三部経の研究』……………下田 正弘 253

青木健著『ゾロアスター教史

- 古代アーリア・中世ペルシア・現代インド—』……………松村 一男 262

外川昌彦著『宗教に抗する聖者

- ヒンドゥー教とイスラームをめぐる「宗教」概念の再構築—』…臼田 雅之 268

- 服部幸雄著『宿神論—日本芸能民信仰の研究—』……………神田より子 273

- 由谷裕哉著『白山・立山の宗教文化』……………長谷川賢二 280

アンヌ ブッシイ著『神と人のはざまに生きる

- 近代都市の女性巫者—』……………川村 邦光 286

京都仏教会監修, 洗建・田中滋編

- 『国家と宗教—宗教から見る近現代日本—』(上・下) ……河野 訓 291

- 大石紘一郎著『オウム真理教の政治学』……………松野 智章 302

篠田節子著『仮想儀礼』(上・下), 藤田庄市著『宗教事件の内側

- 精神を呪縛される人びと—』……………櫻井 義秀 307

- 会報…………… 317

第83巻第4輯(363号) 2010年3月

第68回学術大会紀要特集

公開シンポジウム「思想としての宗教」

宗教としての〈親鸞〉思想	高田 信良	1
〈ポスト哲学的〉思索と〈宗教的なもの〉		
——現代フランス哲学と京都学派の哲学から——	杉村 靖彦	21
無心, 信仰, スピリチュアリティ		
——「抵抗の拠点としての無心」に向けて——	西平 直	42
境界に立つ宗教研究		
——公開シンポジウム「思想としての宗教」へのコメント——	深澤 英隆	65
ディスカッションの要約		74

研究報告

パネル

戦前までの日本における諸宗教研究の現在的意義

戦前日本における中国宗教研究	菊地 章太	79
戦前日本における仏教研究	下田 正弘	80
戦前日本におけるキリスト教研究	芦名 定道	81
戦前日本におけるイスラーム研究	後藤 明	82
パネルの主旨とまとめ	星野 英紀	83

見える宗教教育・見えない宗教教育——宗教教育再考——

海外の公教育における宗教教育の現状と日本への示唆	藤原 聖子	85
公認宗教制の中の宗教教育——タイにおける公教育の事例から——	矢野 秀武	86
高校の教科書に見られる「仏教」について	江田 昭道	87
「心のノート」の可能性と限界——官製スピリチュアルのほころび——	弓山 達也	88
パネルの主旨とまとめ	山中 弘	90

生命倫理の問題は宗教および宗教学に何を問いかけるのか？

キリスト教において生命倫理を語る可能性	土井 健司	91
「宗教家」の生命倫理への取り組み——仏教の立場から——	佐藤 雅彦	92
宗教的な問いは宗教抜きには問えないのか？	森岡 正博	94
生命倫理という宗教性——中国の事例をめぐる初歩的検討——	池澤 優	95
パネルの主旨とまとめ	安藤 泰至	96

宗教哲学の現在を問う——反本質論の波をうけて——

宗教哲学は本質論を離れうるか——多元主義の観点から——	堀 雅彦	98
「宗教の本質」と歴史性——トレルチによるオットー批判より——	小柳 敦史	99
神経科学の冒険——思考実験と宗教哲学の可能性——	松野 智章	100

総目次

他性と多性——他者の哲学／哲学の他者としての宗教哲学——	佐藤 啓介	102
パネルの主旨とまとめ	堀 雅彦	103
西田幾多郎の宗教思想		
西田幾多郎の宗教思想の特質	小坂 国継	105
西田の宗教思想とキリスト教的終末論	浅見 洋	106
西田哲学と禅仏教	井上 克人	107
内在的超越の宗教観——東アジアの宗教との対比において——	高坂 史朗	109
パネルの主旨とまとめ	藤田 正勝	110
近角常観とその時代		
近代真宗の体験主義——近角常観とその信徒たちの信仰——	碧海 寿広	111
近角常観と知識人青年——三木清と武内義範——	岩田 文昭	113
近代大谷派における近角常観の位置	ライアン・ワルド	114
求道会館所蔵史料の意義——整理作業中間報告——	大澤 広嗣	115
パネルの主旨とまとめ	岩田 文昭	116
キリスト教受容と伝統思想——武士道をめぐって——		
キリシタンと武士道	狭間 芳樹	118
韓国の伝統思想とキリスト教	方 俊植	119
内村鑑三の武士道	岩野 祐介	120
『武士道』にみる比較の言説	東馬場郁生	121
パネルの主旨とまとめ	狭間 芳樹	123
キリスト教思想の新しい可能性——「宗教と科学」の問題圏より——		
科学と神学——対話の地平——	濱崎 雅孝	124
美のアイデアと自然の神学——プラトン、数学、キリスト教——	落合 仁司	125
境界の脱構築——「生物学的統制の時代」におけるキリスト教——	金 承哲	126
医学と宗教はどこで出会うのか——現代医学における宗教の意義——	杉岡 良彦	128
パネルの主旨とまとめ	芦名 定道	129
近世から近代へ——日本仏教の再編成——		
近世真宗における「法然」と「親鸞」	引野 亨輔	131
分離せず、衝突せず——明治期の教育と仏教の一側面——	谷川 穰	132
大乘非仏説論の歴史的展開——近世思想から近代仏教学へ——	西村 玲	133
〈日本仏教〉の探究		
——近代における宗門の再編成と歴史記述——	オリオン・クラウタウ	135
パネルの主旨とまとめ	西村 玲	136
明治仏教の国際化と変貌		
明治20年代仏教界における神智学をめぐる言説	吉永 進一	137
明治期仏教とユニテリアニズム——佐治實然を手がかりに——	高橋 原	138

総目次

エリザベス・アンナ・ゴルドン夫人をめぐる……	安藤 礼二	140
鈴木大拙における東洋と西洋——在米中の思想変遷を中心に——	守屋 友江	141
パネルの主旨とまとめ……	吉永 進一	142
明治仏教史を上書きする		
“仏教”を“演説”する……	星野 靖二	144
演説・講演というメディアと近代仏教——啓蒙から修養へ——	岡田 正彦	145
前田慧雲と「自由討究」——本願寺教団の対応と宗学研究法——	岩田 真美	146
高嶋米峰と丙午出版社……	大谷 栄一	148
パネルの主旨とまとめ……	大谷 栄一	149
地域社会における慰霊顕彰の伝統と現在		
近世農村における慰霊顕彰……	清水 克行	150
近世武士社会における慰霊顕彰……	森 謙二	151
沖縄における遺骨収集の展開と慰霊顕彰……	栗津 賢太	153
パネルの主旨とまとめ……	村上 興匡	154
神仏分離研究の現代的意義——神仏関係史の再構築を目指して——		
近世・近代の神仏関係の位相……	阪本 是丸	156
宗教都市宇治山田における神仏分離の諸問題……	牟禮 仁	157
近世における神仏関係——習合と分離——	澤 博勝	158
日本と中国における仏教と固有の宗教との交渉の比較……	河野 訓	160
パネルの主旨とまとめ……	櫻井 治男	161
神仏習合・神仏分離における神職・僧侶の諸相——神仏関係史再考——		
古代・中世の神社組織における神仏関係……	加瀬 直弥	162
賀茂別雷神社における神仏関係の構造——神主・供僧相論を中心に——	太田 直之	163
伊勢の神葬祭から見る神仏関係……	本澤 雅史	165
石川県内における神仏分離……	由谷 裕哉	166
パネルの主旨とまとめ……	藤本 頼生	167
死者供養文化の深層		
ヒトガミの誕生——日本列島における死者供養の淵源——	佐藤 弘夫	169
石塔の思想史——五輪塔を中心に——	松尾 剛次	170
実験動物供養の起こりと展開について……	岡田真美子	171
現代韓国における死者供養の変化についての社会学的考察……	井上 治代	173
パネルの主旨とまとめ……	池上 良正	174
宗教間対話の思想——歴史的諸相とそれらの対話——		
ノージャンのギベールとイスラーム……	矢内 義顕	175
ラテン人への憎悪を超える——ベッコス of 転向について——	橋川 裕之	176
近世初頭における「異教」との邂逅——ピコの場合の意義と限界——	比留間亮平	178

総目次

西欧における仏教理解——認知科学におけるその可能性と問題点——	司馬 春英	179
イスラームにおける宗教間対話の理論	松本 耿郎	180
パネルの主旨とまとめ	八巻 和彦	181
宗教とエコ・フィロソフィ——東洋の宗教伝統を中心として——		
ヒンドゥー聖地と環境問題	宮本 久義	183
中世ヒンドゥー教にみる『地上の天界』説と環境倫理	橋本 泰元	184
輪廻と環境——インド仏教の自然観再考——	渡辺 章悟	186
日本仏教とエコ・フィロソフィ	竹村 牧男	187
天人相関の理論と実践——風水と煉丹術——	野村 英登	188
パネルの主旨とまとめ	渡辺 章悟	189
ジェンダー宗教学の確立に向けて		
ジェンダー宗教学の可能性——現場と理論のはざまから——	川橋 範子	191
イスラーム言説の利用と法識字——女性説教師を事例として——	嶺崎 寛子	192
アジアにおけるキリスト教と脱植民地主義の課題	香山 洋人	193
はざまの位置で——アジア系アメリカ人フェミニスト神学の試み——	黒木 雅子	194
パネルの主旨とまとめ	黒木 雅子	196
教祖伝の脱構築		
記憶・ナラティブ・教祖伝	宮本要太郎	197
新宗教文化の脱教団的展開——思想としての教祖研究——	永岡 崇	199
稿本天理教教祖伝の成立	幡鎌 一弘	200
教祖像の力学——金光教の教祖探求から——	竹部 弘	201
パネルの主旨とまとめ	幡鎌 一弘	202
思想としての禅——近現代における道元の発見——		
諸仏諸祖は道得なり——和辻哲郎の道元哲学——	ラルフ・ミュラー	204
無常仏性を基盤とするヒューマニズム		
——道元思想から現代哲学へ——	ゲレオン・コプフ	205
中国語圏における道元の発見	何 燕生	206
パネルの主旨とまとめ	何 燕生	207
1 部会		
イタリア宗教史学派の形成	江川 純一	209
オットー宗教史学の方法論再考	澤井 義次	210
ド・ブロスにおける宗教起源と言語起源の問題	杉本 隆司	211
デュルケームとモースの「隠された共同作業」——供犠論の生成——	山崎 亮	212
M. エリアーデとルーマニア民族主義	佐藤慎太郎	214
往復書簡集からみる I. P. クリアーノと M. エリアーデの関係	佐々木 啓	215

総目次

亡命者エリアーデの思想における「宗教」	奥山 史亮	216
宗教における思考と感謝	浅野 章	217
宗教共同体の哲学的考察	小田 淑子	219
祈りにおける「かたどり」と「ちから」——レーウの宗教論から——	木村 敏明	220
G. サンタヤーナにおける自然主義と宗教	庄司 一平	221
《概念枠》としての宗教理解を巡って	飯田 篤司	222
科学と宗教とが扱う領域の相異について	冲永 宜司	224
日本における公共宗教(論)の射程	新矢 昌昭	225
宗教概念にまつわる言説空間——現代日本の場合——	近藤 光博	226
2 部会		
「プロテスタンティズムの哲学者カント」説の成立背景	後藤 正英	228
ドストエフスキーとカント	元春 智裕	229
カント『宗教論』における「根本悪」の普遍性	保呂 篤彦	230
カントの宗教論の意義について	氷見 潔	231
ヤスパーズ形而上学とその希望論	岡田 聡	232
ヤスパーズにおける存在の思弁	布施 圭司	234
脱宗教的精神性としてのヤスパーズ「哲学的信仰」	大沢 啓徳	235
『二源泉』以前のベルクソン哲学における宗教性	伊達 聖伸	236
ベルクソン形而上学の宗教的指向性——『二源泉』以前の展開——	安藤 恵崇	238
プラトン『法律』第10巻における魂の問題	土井 裕人	239
プロティノス哲学体系にみられる愛の階梯	堀江 聡	240
紀元後4—5世紀の歴史叙述における「過てる哲人王」ユリアヌス	中西 恭子	241
擬ディオニュシオス・アレオパギテースのキリスト像	高橋 渉	243
転回と回心——バルトとアウグスティヌスの場合——	松田健三郎	244
進化における宗教の問題	滝澤 克彦	245
「信」と「虚構」に関する理論的研究——分析哲学を手がかりに——	谷内 悠	246
Philosophia perennis という概念の歴史的変遷をめぐる考察	リアナ・トルファシュ	248
3 部会		
S. ヴェイユの工場体験	脇坂 真弥	250
ジャック・デリダの『コーラ(場)』〈第三のもの〉を読む	斎藤 明典	251
L. シュトラウスによる F. ローゼンツヴァイク批判の射程	佐藤 貴史	252
『論理哲学論考』の「文番号七」の原形と新解釈	星川 啓慈	253
ヘーゲル祭祀論の射程	石川 和宣	255
ヴァイマル期ドイツの宗教思想	宮嶋 俊一	256
ティリッヒの「究極的関心」と真理	澤井 治郎	257
テキスト科学とインド哲学研究の方法論について	三浦 宏文	258

総目次

再考ブーバー「我-汝」思想	堀川 敏寛	259
マルティン・ブーバーと神経験	大川 武雄	261
ポエジーと哲学——ドイツ初期ロマン主義の聖なるものへの関連——	田口 博子	262
フィヒテとシェリングにおけるヨハネ解釈について	諸岡道比古	263
キルケゴール思想における罪の不可避性について	行武 宏明	264
ハイデガーの現象学とキルケゴール	若見 理江	266
ハイデッガーと洞窟の比喩——哲学者の死について——	田鍋 良臣	267
Sein zum Tode 再考——ハイデガー『存在と時間』と「死」の概念——	松本 直樹	268
4 部会		
近世初期キリシタンの長崎大殉教図と日西関係	谷口 智子	270
キリシタンにおける近世と近代	内藤 幹生	271
ブラジル産ネオペンテコスタリズムの日本における展開	山田 政信	272
田中輝義の意識論	寺尾 寿芳	273
新渡戸稲造と国際交流	森上 優子	275
聖書・学問・共同体——東京大学「矢内原忠雄展」からの一報告——	柴田真希都	276
遠藤周作の思想「母なるもの」再考	長谷川(間瀬) 恵美	277
神谷美恵子の宗教思想——『生きがいについて』の射程——	釘宮 明美	278
内村鑑三と A. J. ヘッセル——楯円の一神教思想について——	手島 勲矢	280
回心の比較宗教——廻心とタウバ——	徳田 幸雄	281
ヘーシュカストの祈りにおける身体技法	袴田 玲	282
野宿者の入信動機——救世軍の事例から——	白波瀬達也	283
「民衆」概念による近世フランス神秘主義へのアプローチ	渡辺 優	284
ヴィジョンとイメージ	細田あや子	286
マルグリット・ポレートに対する異端審問について	村上 寛	287
シオランにおける無の位相と展開	藤本 拓也	288
「関係」, 「相続」, 「あたかも」——エックハルトを中心に——	高木 保年	289
5 部会		
古代ギリシアにおける神聖 (hieros) 概念について	葛西 康德	291
古代ローマにおける religio 概念について	小堀 馨子	292
パウロの宗教的自覚について	南部千代里	293
創世記1章1節は, その1章の表題か	野口 誠	294
ヘブライ語聖書研究——社会科学批評によるアプローチ——	高橋 優子	296
『啓蒙の弁証法』における反ユダヤ主義	内藤 李香	297
改宗制度にみるユダヤ教のアイデンティティ定義	櫻井 丈	298
スピノザとユダヤ世俗主義——ヴァイレルのユダヤ神権政治より——	平岡光太郎	299
ユダヤ教におけるギリシア文化の衝撃	市川 裕	301

総目次

聖人の誕生——コプト・キリスト教を事例として——	岩崎 真紀	302
クザーヌスにおける“神の名”の問題	島田 勝巳	303
永遠についての瞑想——時間と永遠をめぐる神学的哲学的考察——	福嶋 揚	304
「アーリア人イエス」の宗教史	久保田 浩	306
ミシェル・アンの「キリスト教の哲学」におけることばの問題	古荘 匡義	307
ヨーロッパ・キリスト教の「信」——坂口ふみ氏の考察を踏まえて——	若林 裕	308
トマス・ベリー神父にみる自然と身体——大いなる業のために——	木村 武史	310
正義と配慮——近代カトリック世界における「倫理」的活動の展開——	寺戸 淳子	311

6 部会

信徒が教えを担う条件——日蓮宗不受不施派と入道——	田中久美子	313
天英院照姫と法華信仰——『常泉寺文書』を中心に——	長倉 信祐	314
「法華翻経後記」をめぐる諸問題	金 炳坤	315
『法華験記』にみるいわゆる「妙法経力」の諸相	間宮 啓壬	316
日蓮聖人における『摩訶止観』受容の問題	奥野 本勇	318
日蓮と預言者類型——佐渡流罪体験の意味するもの——	笠井 正弘	319
長松日扇の教化活動の一研究——曼荼羅本尊授与をめぐる——	武田 悟一	320
近世日蓮宗寺院文書にみる海防と寺院——常忍寺文書を中心に——	木村 中一	321
『立正安国論』稿了の期日について	関戸 堯海	323
西田の場所的論理とカントの対象論理——妥当ということ——	岡 廣二	324
鈴木大拙と『大乘起信論』	嶋本 浩子	325
西谷啓治における「近代日本」とニヒリズム	秋富 克哉	326
清沢満之の内観主義	村山 保史	327
斎藤茂吉の老いの諸相	小泉 博明	329
フリッチョフ・シュオンと井筒俊彦	中村廣治郎	330

7 部会

親鸞の利益観について——教行信証を中心として——	中山 彰信	332
真宗大谷派の北海道開教に関する一考察	福島 栄寿	333
曾我量深における信の論理——欲生心と逆対応——	陳 敏齡	334
近代日本における仏教と科学——真宗僧佐田介石を例として——	常塚 聡	335
近代真宗本願寺派教団と初期関東別院	野世 英水	337
真宗障害者福祉における「自立」考——社会モデルを視野に入れて——	頼尊 恒信	338
三願転入とカウンセリング——親鸞とC. ロジャース——	友久 久雄	339
真宗信者の宗教意識と社会的行動に関する調査	ウーゴ・デッセイ	340
現代社会における日本宗教とメディア	エリザベッタ・ポルク	342
宗教心理と浄土真宗	林 智康	343
初期真宗教団の原風景	安藤 章仁	344

総目次

存覚における聖道門理解の一考察	赤井 智顕	345
豊前崇廓師の教学及び行実に関する一試論	恵美 智生	347
親鸞の「浄土」について	加藤 智見	348
超越論的自覚と親鸞の「三心」釈	中山 一萱	349
親鸞における「少善」について	平原 晃宗	350
親鸞伝承の始原試考	御手洗隆明	352
8 部会		
善光寺時供養板牌における一考察	小林 順彦	354
『宝性論』と『仏性論』——如来蔵の十義における客塵煩惱——	末村 正代	355
徳一『真言宗末決文』〈即身成仏疑〉について	環 栄賢	356
一遍教学の一試論——一向俊聖との比較を中心に——	長澤 昌幸	357
明遍教学と静遍教学	那須 一雄	359
「五悪段」生成に関する一試論	加藤 弘孝	360
一条兼良『勸修念仏記』とその時代	龍口 恭子	361
現代社会と浄土思想	五十嵐隆幸	362
臨終における光明表現再考	神居 文彰	364
存覚上人における来迎思想	平井幸太郎	365
中世武士と一遍・時衆の周辺	大山 眞一	366
横川顕正と浄土教	和田 真二	367
慈雲の袈裟研究と実践の意義	松村 薫子	369
慈信房善鸞上人義絶問題について	藤井 淳	370
9 部会		
史的ダルマ論の試み——生没年の秘密——	宮村 重徳	372
起塔を通した永遠の釈尊の感得——『法華経』のブツ観——	鈴木 隆泰	373
『大毘婆沙論』成立の諸問題	三友 健容	374
『阿毘曇心論』業品における三障の軽重について	智谷 公和	375
『中論』の空性理論における矢島羊吉博士の理解について	木村 俊彦	377
受戒健度に於ける仏伝	龍口 明生	378
吉蔵と『摂大乘論』	藤野 泰二	379
『十地経』における第九地の位置について	平賀由美子	380
日本律蔵関係章疏にみられる朝鮮仏教認識について	福士 慈稔	382
華嚴思想における理と事——プラトニズムを見る——	宮野 升宏	383
日本中世の寄進状について	稲城 正己	384
日本近世初期における仏教支援ネットワークについて	高井 恭子	386
近代ドイツ宗教思潮における仏教——ベックを一事例として——	春近 敬	387
吉田兼好の死生観	新保 哲	388

総目次

10 部会

キリスト教とグローカリゼーション——南インドを事例にして——	岡光 信子	390
ビシュワスという信じ方——ネパールのキリスト教における信念——	丹羽 充	391
転換期仏教寺院における活動——イメージ戦略と感情労働の間——	高橋 嘉代	392
パンニャーサジャータカ研究の意義	茨田 通俊	393
マハトマ・ガンディーと藤井日達	外川 昌彦	395
渡辺海旭をめぐる社会事業と仏教の関係性について	菊池 結	396
仏教思想に基づくケア論の展開	坂井 祐円	397
大正期の仏教教化をめぐる	熊本 英人	398
近代日本における大学制度と僧侶育成に関する一考察	江島 尚俊	400
祈禱寺院における信者獲得と固定化	阿部 友紀	401
、心會と教祖熊崎健翁——教団本部における資料調査から——	下村 育世	402
「みかぐらうた」のひのきしん	堀内みどり	403
天理教原典Ⅲにおける「かしの・かりもの」の理	澤井 一郎	405
戦後台湾における生長の家の受容層の変遷	寺田 喜朗	406
教団変革期における体験談の変容——世界救世教を事例として——	武井 順介	407

11 部会

旅順博物館所蔵の漢文無量寿経写本	三谷 真澄	409
『医心方』と『外台秘要方』	多田 伊織	410
中国における「維摩詰」語釈の変遷	山口 弘江	411
中国における菩薩戒について	久田 静隆	412
雑誌 CEM に見る現代「アレヴィー」思想の変化	佐島 隆	413
少数派フィクスの理論と論客——イスラーム法の新潮流——	松山 洋平	415
「俗人」説教師の活躍とイスラムにおける権威の問題	八木久美子	416
ジュナイド神秘主義におけるファナー論	澤井 真	417
仏教儀礼論の可能性——カッシーラー、アサドを手掛かりに——	小野 真	418
カトリック神学と経済学		
——金融危機と教皇の新しい回勅——	ハンス・ヨアヒム・ペピン	420
主権論における“日本的系譜”の可能性について	田中 悟	420
チベットに伝わったスマーガダー・アヴァダーナ	梶濱 亮俊	421
『プラサンナパダー』に引用される『八千頌般若経』	庄司 史生	422
サティーをめぐる語りの重層性	田中 鉄也	424
インド民衆神話における救済——カルキ・プラーナを事例として——	渡邊たまき	425

12 部会

瓦に見る水のモチーフ	春日井眞英	427
白南準における禅——その作品から——	榎本 香織	428

総目次

近代思想における児童文学の宗教性……………	大澤千恵子	429
ブルターニュにおける図像と宗教性——現代的展開事例から——……………	中島和歌子	430
柳宗悦の自然観……………	本多 亮	431
中世禅宗寺院の伽藍空間における宋代風水術の影響について……………	鈴木 一馨	432
迷信・呪術・魔術——西欧近世の魔女言説から——……………	黒川 正剛	434
Th. マン文学における「敬虔」の問題……………	掛川 富康	435
神道思想のパラダイム——デルマー・ブラウンの説をめぐって——……………	原 真和	436
近世中期における還俗僧と「神道」……………	井関 大介	437
久我長通撰『八幡講式』をめぐって——中世八幡信仰の一側面——……………	舩田 淳一	439
近世日本における宗廟観……………	井上 智勝	440
近代神社祭式の成立——開放された神社の儀礼——……………	竹内 雅之	441
内務省神社局と神社調査……………	遠藤 潤	443
内務官僚の神社観とその系譜——社会事業との関わりのなかで——……………	藤本 頼生	444
13 部会		
江戸中期の戯作者・大江文坡の仙教——道教との関連で——……………	坂出 祥伸	446
道教の瞑想における光のシンボリズム——『太乙金華宗旨』の場合——……………	長澤 志穂	447
平田国学における体験的幽冥研究の展開……………	宇野 功一	448
排仏論の根拠としての海外情報——平田篤胤の事例を中心に——……………	森 和也	449
淵岡山より見た藤樹の思想「良知・孝」……………	鈴木 保實	450
神道思想における生命主義的救済観……………	鈴木 一彦	452
弘道館とその祭神——会沢神学の構造——……………	桐原 健真	453
神祇伯白川家における鎮魂祭……………	山口 剛史	454
北野天満宮瑞饋祭についての一考察——宗教儀礼の展開を中心に——……………	吉野 亨	456
狩猟民の神話と世界観——〈動物の主〉再考——……………	山田 仁史	457
古代北欧社会における血の復讐——主としてサガを通して——……………	中里 巧	458
19 世紀神話学とチェンバレン……………	平藤喜久子	459
世界神話学と世界宗教史……………	松村 一男	460
ジュリア・クリステヴァにおける「抑圧」と「聖なるもの」……………	斎藤 喬	462
「心理臨床科学」の宗教——故河合隼雄の〈かたり〉——……………	戸田 游晏	463
14 部会		
現代巡礼における死の位相——スペイン・サンティアゴ巡礼の事例——……………	岡本 亮輔	465
聖地旅行をめぐる「支え合い」の歴史——高齢者・障がい者の事例——……………	板井 正斉	466
身延山参詣記にみる巡拝寺院について……………	望月 真澄	467
仏教教団と講集団の関わり——四国遍路の事例から——……………	栗田 英彦	468
モルディヴの仏教について——カーシドゥ島——……………	原 隆政	470
アウグスティヌス時代のマニ教徒の自己理解について……………	山田庄太郎	471

総目次

メソポタミアの「呪術師」	渡辺 和子	472
戦間期ハワイ日系宗教と2つのナショナリズム	高橋 典史	473
総力戦体制下における信仰と戦争——「日本基督教」を中心に——	川口 葉子	475
日本の新宗教における国家観・天皇観と実践——解脱会の事例から——	塚田 穂高	475
無縁遺骨と恨（はん）——被徴用者等の遺骨調査から——	工藤 英勝	477
明治初期における教導職の「敬神愛国」観	藤田 大誠	478
「特高教本」におけるナショナリズム	小島 伸之	479
靖国をめぐる論議——日本における政教分離概念をめぐる——	丹羽 泉	481
新宗教のナショナリズムと敗戦の神義論	對馬 路人	482

15 部会

沖縄宮古島北部の祭祀儀礼について	川田 桂	484
宗教的職能者の選択——現代沖縄の死者儀礼を事例として——	越智 郁乃	484
琉球の最高神女・聞得大君の神馬について	坂本直乙子	486
戦後沖縄の火葬——那覇若狭町、辻原の墓地整理をめぐる——	加藤 正春	487
里修験と陰陽道——新出の『篋簋』の分析を中心に——	小池 淳一	488
ト占における宗教的職能者の関与について——粥占を事例として——	亀崎 敦司	489
受動性のアニミズム——環境認識論の再考——	長谷千代子	490
御霊信仰の展開過程	米井 輝圭	492
ト占技術から思索・信仰・実証科学への展開	平野 孝國	493
「霊場」における死者供養の具体相——秩父観音霊場を事例として——	徳野 崇行	494
検証／顕彰される来歴——墓地の近代をめぐる——	土居 浩	496
韓国・円仏教の死者儀礼——全羅南道珍島の事例から——	川上 新二	497
日本民間神楽の「白い布」	三村 泰臣	498
薪能の興行形式にみる宗教性	永原 順子	499
江戸・明治期の随筆類における富士信仰	大谷 正幸	501
鎌倉時代の夢信仰の一断面——沙石集を中心として——	河東 仁	502

16 部会

Oxford Group Movement の活動と影響	葛西 賢太	504
西田天香の宗教教育論	河村 新吾	505
接触領域としてのオリシャ崇拜——アメリカ黒人の社会宗教運動——	小池 郁子	506
カルティニにおける「新しい時代」の人間像	相澤 里沙	507
シンガポールの国民統合と宗教間対話	山下 博司	509
文化としての宗教——ドイツにおける宗教シンボル禁止法論争から——	堀 彩子	510
多文化共生——不況の中の大泉——	野村 誠	511
宗教間対話を支えるものとしての求道性——東西霊性交流の場合——	峯岸 正典	512
21 世紀宗教間対話の潮流——各対話指針の比較から——	山梨有希子	514

総目次

宗教的生命倫理は可能か?——エンゲルハートを手掛りに——	村上 喜良	515
日本の大学における「生と死の教育」の可能性	沖永 隆子	516
中有縁起と現代的いのち	金 永晃	517
「縁起」の倫理学は可能か——仏教的生命倫理学の原理をめぐって——	前川 健一	519
再生医療と生命倫理	淵上 恭子	520
宗教ツーリズムの生成と課題	松井 圭介	521
環境法に関する一考察	太田 俊明	522
宗教史跡の観光資源化——沖縄県南城市の地域振興政策を事例に——	吉野 航一	524
17 部会		
子育て支援活動におけるスピリチュアリティの働き	井上ウィマラ	526
医療・福祉現場における〈ビハーラ僧〉の現代的役割について	打本 弘祐	527
現代の「お迎え」現象と聖衆来迎——仏を迎えるトレーニング——	大村 哲夫	528
インターネット開発思想と宗教的共同性の邂逅	今井 信治	530
宗教の社会貢献の領域と形態	稲場 圭信	531
社会的宗教と他界的宗教への序章——ケン・ウィルバー論から——	津城 寛文	532
現象学的社会学における超越概念	諸岡 了介	533
宗教とグローバル化——ウルリッヒ・ベックの世俗化論——	上村 岳生	534
宗教と博覧の近代史——社会貢献の視点から——	濱田 陽	535
宗教の社会貢献活動についての運動論的視座	寺沢 重法	537
養護教諭と子供達との人間関係——M. ブーバーを手がかりに——	河西多津子	538
近代日本における「宗教的情操」教育——教育論争史からの一考察——	齋藤 知明	539
宗教文化教育と宗教情操教育の相違点	井上 順孝	540
国語教科書にみるインドの公教育の宗教的要素	澤田 彰宏	542
川崎市田島小学校における神道教育事例の考察——山崎博を中心に——	中道 豪一	543
会報		545
宗教研究 2009 年度総目次		xxii